

三井のリフォーム住生活研究所 所長 西田 恭子

震災後の仙台を訪ねて

仙台的東北工業大学とメ

ディアテークを訪れた。今年度のインテリア学会は、東日本大震災後に初めて東北において開催された大会であるため、主要な建築やインテリアに対する影響、また震災の被害と復旧・復興の現状について、専門家の説明を聞きながら、見学したいと企画された。

東北工業大学の九号館・一〇号館は、震災前の二〇〇三年竣工で、構造的には高層の制震構造であり、設備的にも太陽光発電や屋上緑化・雨水利用など、パッシブやアクティブの省エネ・省資源を実現しており、これらの要素をデザイン的に消化した現代建築・インテリアとして、また周辺環境に配慮した建築として、「JIA環境建築賞」など多くの賞を受賞している。優れたデザイン建築を見ることが、日頃住宅のみに関わっている設計者にとっても大切なことだ。太陽光発電や屋上緑化・雨水利用も住宅に取り込むときには、規模の小さいものになっってしまうのだが、地球と地域と建物の関係性においては同じ思いで創られてい

く。

今回この建物では、見える状態で制震装置が組み込まれていた。東日本大震災では、この装置が大きな役割を担ったと思われるのだが、一箇所震災により制震装置が破断した。住宅でも耐震方法の一つに制震装置を設置するのだが、破断する可能性までなかなか想像していかないのではと思う。

その破断箇所は誰もが見える状態で置かれていた。精一杯役割を果たした後に破断したことが伺われた。

だが、一箇所が破断したくらいでは建物はびくともしていない。天井が落ちたわけでもなく震災を感じさせる箇所は他にはなかった。

住宅の耐震リフォームでは評点一・〇以上取るように計画する。一・五以上は「倒壊しない」となることを、一・〇以上を耐震での目標基準とする。一・〇以上は「一応倒壊しない」という表現になり、建物がびくともしないという事ではないが、圧死するような生命に及ぼす危険はないというのだが、今回の制震装置の破断箇所を眺めなが

ら、「一応倒壊しない」ことが大事なのだ実感した。

メディアテークは、伊東豊雄氏の設計で二〇〇〇年に竣工し、そのチューブ構造は現代建築・インテリアとして、世界の注目を浴びた、あまりにも有名な存在である。仙台市民の情報生活の核心として、都市生活の新しい中心であったメディアテークが、大震災では一部が被災し、今年一月末に復活したばかりである。こちらでも地下のチューブ部分に横材を付けた箇所も見せて頂き、天井材などは破損したものの、なぜ構造的に問題がなかったのか確認させていただいた。

大学は学問探求の場ではあるが、同時に地域との関わりをどう作り上げるのかも課題になっている。特に人々の生活と直結し、街づくりの一環を担っている建築家の責任は大きい。東北工業大学の学生が「地域の人が集まる居場所作りをしていくのも、建築家の仕事ではないか」と言い、先生は「建築家は、建物を建てた後のストーリーを考えておくべきなんだ」と語っている。



西田恭子氏のプロフィール「一級建築士。「三井のリフォーム」で設計を手がけ二五年。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム住生活研究所」の所長に就任。新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。日本女子大学非常勤講師。(株)日本建築家協会正会員。